

学校経営方針

校長 佐久間俊幸

【はじめに】

3月11日に起きた東日本大震災で犠牲となった人たちへの哀悼の意を忘れず、避難生活が続く人々の忍耐とその支援者たちの献身に敬意を払いながら、大杉小学校の子供たちのために一生懸命に職務に取り組んでください。

大きな余震が続き、子供たちは不安な思いで毎日を送っていることと思います。原発事故の対応も先が見えず、日本中が暗いムードに包まれ、不安の嵐が吹き荒れています。

そんな時だからこそ、未来を担う子供たちには、勇気と希望をしっかりと持たせ、明るく元気に、そして、思いやりの心をもった人に育てていってほしいと願っています。

平成23年度の新たな一步を踏み出す今、「すべては子供たちのために」という強い思いをもって、教育活動を進めていってください。豊富な知識、優れた指導力があっても、「子供たちのために」という熱き思いと前向きに取り組む姿勢がなければ、子供たちのより良い成長は望めません。大杉小学校の子供たちのために、それぞれの持ち場で、自分の仕事に誇りと責任をもって、前向きに取り組んでいってください。

【教育目標】

健康な子 進んで取り組む子 思いやりのある子

の具現を目指し、日々の教育活動が、大杉小学校で学ぶ子供たちにとって充実したものになるように努める。今年度の重点目標は、「思いやりのある子」

【学校経営の基本方針】

教育とは、人間が人間を人間らしく育てる営みである。学校教育という場で、私たちは、どの子にもその子の能力に応じた教育を行い、人間形成を目指すことが大切である。

【学校経営の重点】

1. 子供を深く理解する

子供の側にたった教育を推進するには、まず、その子をよく知ることが大切である。子供とのふれあいをできるだけ多くして、その子を深く理解することに努めたい。

- ★児童に関わる諸問題を未然に防ぎ、早期に解決するために、児童に関わる情報交換を重視し、「児童理解」「指導方針の共通理解・実践」に努める。
- ★一人一人の子供への「声かけ」「ふれあい」を大切にする。一日に一回は、どの子ともふれあうように努める。
- ★子供の声に耳を傾ける。子供のちょっとした一言の中に、子供からのSOSや願いが込められていることを肝に銘じてほしい。子供が聞いてもらいたいと思った瞬間を大切に。「後で聞くね」では、もう、子供からの信頼は失われる。
- ★保護者との信頼を深めることにより、子供への指導の成果があがる。教育者としてプロである私たちから、保護者とのパイプを太くするための働きかけをすることがこれからは今まで以上に必要である。

2. よくわかる授業をする

授業がわからなければ、子供たちにとって、学校は楽しいところではなくなる。基礎学力をしっかりと身につけさせる上からも、どの子にも十分にわかる授業を行うことがプロとしての責務である。

- ★ どの子にも授業の中で、「できた喜び」「学ぶ喜び」を体験させるには、子供たちの実態に合った指導計画を作成することが必要である。
- ★ 「計画なくして、実践なし」といわれる。週案により、子供たちの理解度により進度を調節し、児童の行動や問題点を記録しておくことが必要である。また、自らの指導の計画・実践・評価の記録として、週案を校長に提出し、子ども達の成長の様子を知らせてほしい。
- ★ 感動のある授業、わかる授業を行うには、教材・教具の工夫だけでなく、指導体制の工夫もしてほしい。(学年内での授業交換や協力教授などを取り入れて)

保護者の間では、学力低下の不安が広がっている。その不安を取り除くには、理屈やいいわけでなく、子供たちの成長する姿で応えるしかない。プロとしての実力が問われていることを、肝に銘じておきたい。

3. 校内研究について

校内研究での授業実践を、全体の財産としていきたい。そのことが、大杉小学校の子供たちをより良く育てていくことに通じる。

今年度も継続して、「豊かな国語力を育てる指導法の工夫」を研究主題として、国語の授業を通して、研究を進めていく。研究主題に迫ることはもちろんだが、子供たちの読解力・表現力の欠如が危惧されている今、国語科としての教科のねらいをしっかりと押さえた国語の授業を実践して行ってほしい。

4. やさしい子を目指して

地球環境の破壊は、自分だけがよければいいという人類の足跡のつけである。また自らの属する民族・宗教のエゴが、世界中で起きている戦争や紛争の原因である。日本においても、日々おきている事件のほとんどが、自分のことしか考えない者たちが引き起こしている。

自分だけでなく、他を思いやる心を育てることが、特に大切である。心の荒廃からくる問題行動や「いじめ」の問題も、心のあり方に起因している。思いやりのある豊かな心を育てたい。

- ★ 「いじめ」や「差別」の絶対のない学校づくり。
子ども達一人一人を大切にされた教育を推進する。自分が大切にされていると感じている子は、他の人を大切にできる。
- ★ 道徳授業地区公開講座の開催を通し、保護者に道徳の授業のねらいを啓発し、学校と保護者が同じ考えのもとに、子供の心を育てていけるようにする。
- ★ 様々ななかかわりの中で、自分と異なるものを認め、共に生きていこうとする心を育てていく。
- ★ 教師が様々な子どものよさを認める姿から、子ども達に友達のよさがわかる眼を育てる。理屈ではなく、後ろ姿で教えていきたい。
- ★ 協力して物事をやり遂げる充実感を、数多く体験させることが必要である。

5. 生活指導を充実させる

学校生活を楽しく送るためには、子供たちが健康で安全でなければならない。そのためには、守るべき約束と身に付けなければならない**基本的生活習慣**がある。学校のルールを守れないものに、社会のルールは守れない。社会に適応した生活ができるように「社会性」の育成に力を注いでいく。

- ★ 「生活指導連絡会」や「生活指導研修会」の機会を通し、大杉小学校の子供たちの実態に合った生活指導の手立てを確立し、共通実践を行う。
- ★ 基本的生活習慣の育成に努める。「おはようございます」「ありがとう」「すみません」が、自然にいえる子であってほしい。
- ★ 公共物・公共の場でのマナーを大切にすることを育てる。
- ★ 欠点ばかりを指摘するのではなく、良い点を認め、励ますなかで子供を育てる。
- ★ ピグマリオン効果で言われているように、子どもは私たちの思いで伸びる。たった一言のほめ言葉で、子供は変わることがある。

[学校経営上の配慮事項]

1. 教育公務員としての自覚を持ち、服務規律を厳守する。

教育は信頼の上に成り立つ。子供の声、保護者の声に十分に耳を傾けてほしい。また、信頼を築くには時間がかかるが、**信頼をなくすのはたった一回の失敗で一瞬のうちになくすことを、肝に銘じてほしい。**たった一人の不祥事が、学校のみならず、区全体、また、教育界全体の信頼を失わせることになる。

- ★ 子供を心から愛しむ。教えるの語源は「愛しむ」である。力で押さえつけようとする「**体罰**」は、教師としての敗北であり、法的にも許されない犯罪行為である。
- ★ **指導計画の裏づけとしての週安簿の提出**は、教師としての義務であり責任である。
- ★ 自己申告書の記入や校長・副校長との面接を通し、職務のめあての明確化、能力・指導力の向上を図る。
- ★ 保護者への連絡やお知らせは徹底すること。大切なことは、必ず文書で行う。
- ★ 事故や事件などの**保護者への対応は、迅速・慎重・誠実**に行なう事。自分の子供ならこうしてほしいという対応をすること。事故や事件を未然に防ぐための、事前の指導が大切なことは言うまでもない。
- ★ 子供の事故や事件については、**すぐに校長・副校長に報告・連絡・相談**をし、必ず記録をとっておく事。週案を記述しているかどうかは極めて重要である。
- ★ 通勤については、原則、自動車通勤を認めない。東京都においては、体罰について自動車事故が大きな問題になっている。

2. 大杉小学校を子供たちの心の故郷に！

3・4年生の「荒川中土手探険」「大杉カンフー」、5年生の「チャレンジ・ザ・ドリーム」、6年生の「プラスバンド」、5・6年生の「大杉ソーラン」は、本校の大きな特色であり、伝統である。これらの活動は、子供たちの心を育てると共に、子供たちにとって大きな思い出となるものである。

故郷とは時間を超えて、ふっと思い出す心のよりどころである。懐かしさと共に、心やすらぐところ・思い出である。大杉小学校で過ごした日々が、子供たちにとって、そんな心の故郷になってほしいと願っている。

【いかに言い訳しても、子どもがだめなのは、教師の不始末によるものです】

敗戦後、新制中学ができました。それまで女学校で教えていた私は、なんとか新しい日本のために身を投じたいという思いで、中学校の教師に転出しました。東京の深川第一中学校でした。

大変な時代です。ここも空襲で焼けてしまって、教室などありません。ガラスやコンクリートのかけらが散乱した講堂、窓ガラスもなく火熱でくねくねした鉄の窓枠、黒板もなければ教科書もない、えんぴつもノートもありません。

子どもたち自身も、強制疎開から帰ったばかりです。親たちもその日その日の食べることに追われて、子どもをかまうゆとりもありません。ですから、子どもは元気にわんわん駆け回るばかりで、私が「静かに」などと言っても耳に入るものではありません。

私は立ち往生してしまいました。今まで教えていた女学校の生徒とはまったく違います。人間の子どものという気がなくて、駆け回る子どもたちをあ然と見つめていました。

戦争中に私と家族は空襲を避けて、千葉県の子孫に疎開していました。そのとき、いろいろな品物を傷つかないように新聞紙でくるんで運びましたので、うちには古新聞紙がたくさんありました。その新聞で教材を作ろうと私は思いつき、新聞を切りぬいて、一つ一つ教材を作っていました。コピーなどありませんから、一人一枚として何百と作らなくてはなりません。そしてそれぞれに「学習のてびき」のようなものも作って添えました。どうして新聞を教材にと思いついたのかは、わかりません。そこらへんに散らばっていたからかもしれません。

家にあつちびた鉛筆数本とその教材を持って、学校へ行きました。子どもたちは、相変わらず騒ぎ回っています。

たまたま私のほうに走ってきた子どもを、私はぱっと羽交い締めをしました。そして、「これ、やりなさい」と一つの教材を渡しました。もう一人捕まえて、別の教材を渡しました。

十人ぐらいに渡したころ、ふと教室の後ろの一角が静かになったような気がしました。何をしているのかと見ると、さっき教材を渡した子が、くにやくにやに曲がった鉄の窓枠のわずかに平らなところに新聞紙を当てて、一生懸命なにか書いているのです。

その子どもの目は、真剣そのものです。きれいに澄み切った、まさに人間の子どもの目でした。

私は、隣の小さな部屋にはいって、感動の余り、思わず泣いてしまいました。学ぶことの尊さに胸がふるえました。

こんなに真剣に純粋に子どもは知恵を求め、伸びたいと願っているのです。それなのに教師のほうで、適切な教材を与えられず、まちがったやり方をしていたから、だめだったのです。

それ以来、私は子どもがだめなのは、どんなに言い訳をしてみても、やはり教師の不始末のせいなのだ、と自分に言い聞かせていました。

それは職業人としての教師の責任なのです。